

雷の子

カトリック町田教会
町田市中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかにずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



「主の名によって来られる方、
王に祝福があるように。天には
平和、いと高き所には栄光」
(ルカ19. 38)

引き潮の時、満ち潮の時

主任司祭 林 正人

昨年末、子供の頃よく聴いていたレコードがCDで再発売されたので、購入し、今も部屋で度々流しています。有名なシンガーソングライター、さだまさしの初期のライブ・アルバムです。私は少年時代、結構なさだまさしファンで、日本の古典が好きになったのはさださんのおかげと思うほどです。『関白宣言』がヒットした頃にギターを弾き始めたこともあり、古文とギター、

二つの先生と勝手に位置付けています。さて、このライブ・アルバムの中に、『転宅』という曲が収められています。父親の事業の失敗で、大邸宅から狭い長屋に移り住んだことを唄った、さださんの実体験（当時、小学一年生だったそう）に基づく曲です。「そこで初めて家で過ごす、親父の背中を見た」「おばあちゃん

ないだろうと、笑い乍ら言った」。曲は最後に、もう一度家を替わった、しかし一番喜ぶはずの人は間に合わなかった、と唄い、「人生は潮の満ち引き、来たかと思えばまた逃げて行く。失くしたかと思えばまた、いつの間にか戻る」と結ばれます。

この『転宅』という曲、さださんのベスト盤に収録されたこともなく（多分）、然程知られていないと思われまふ。が、私にとってこの曲が、ある意味忘れられない一曲になった理由は、もう十年以上前、読売新聞のコラム『編集手帳』にこの曲が取り上げられたことに因ります（当時、この『編集手帳』を執筆されていたのは、竹内政明という方で、私の尊敬する文筆家の一人です）。

当日のコラムは、無理心中を図った男について取り上げています。小さな会社の経営に悩み、父母と妻を刺殺、幼い子供たちにも怪我を負わせ、自身も腹部を刺して重傷という、何ともやりきれない事件。この事件について、件の『転宅』を引き合に出しながら、『人生は潮の満ち引き』という一節が胸を離れない「引き潮のたびに絶望していは、命がいくつあっても足りない」「家族が身と心を寄せ合っていれば、潮の満ちる

自戒の念を込めて

運営委員会議長 安藤 康弘

一年前、誰がこの事態を想定していたでしょうか？ 例年と変わりなく新しいスタートを切った筈でしたが、すぐに今までと違うことに気付かされました。

二月、灰の水曜日以降公開ミサは中止になりましたが、少し落ち着けば復活は迎えられると漠然と思っていました。だからこそ水面下で準備をしていました。しかしながら、そんなに楽観視できる事態ではありませんでした。

ご復活も中止：ただ自宅待機の状態が続きました。この

さる。高々五十数年の人生ですが、それなりに棘の多い門松をくぐって来た結果、私はかように信じています。

コロナ禍は、総ての人に降りかかりましたが、それによって受けた苦勞（試練）は、人によって様々でありましよう。皆様にとっては、人生何回目かの「引き潮」でしたでしょうか。

今、過去の「引き潮の時」を思い出しています。辛い思い出もあります。しかし、いま思えば、もがいている正にその時、神様は「満ち潮の時」を準備して下さいました。今回も、きっと…。

ままで良いのか？ 何か行動をしないで良いのか？ 自問を繰り返すも、緊急事態宣言の中ただ静観するだけでした。宣言が解除され、公開ミサ再開に向け運営委員会も再始動しますが、感染拡大防止を基調とした人数制限、消毒対応等、今まで経験の無いことばかりで、相応に検討を尽くすも、最善な形を導き出せる訳もなく、「とりあえずやるしかない」と、何とかミサ再開には漕ぎつけました。

信徒の皆様からの要望や提案も踏まえ、色々と改善

は行っています。が、「最善な形」自体が何なのかも確信が持たず、慎重な試行錯誤は未だ続いている状況です。

クリスマスと元日のミサにしても、聖堂に入りきれない事態を憂慮し、多くの信徒の皆様が自宅でお祈り頂いたことで、大きな混乱もなく無事に執り行うことが出来ました。本当に感謝します。

今年、信者総会にしても例年通りの開催は出来ません。感染防止のため、運営委員と地域ブロックの代表（連絡員）のみで開催します。

現状に満足している人はおそらくいないと思います。誰もが色々な我慢を強いられています。その我慢も人によって様々でしょう。教会の友達に会えない子供たち。職場での感染の恐怖と戦いながら働いている人。家族から教会に行かないよう言われている高齢者。コロナ禍で経済的に苦しんでいる人。

私たちは自分の苦しみと戦うだけでも大変で、互いの苦しみに目を向けることは簡単ではありません。

互いの苦しみに気付きたいやることが、次の一歩を生み出すことに繋がると思っています。昨年は歩みを止めることしか出来なかった。今年はずしずつでも前に進めたら…。

町田教会のみなさまへ

神学生 星野 倫淳

町田教会のみなさま、神学生の星野です。2019年から約二年間、お世話になりました。本当は顔を合わせてこの感謝の気持ちを伝えたいのですが、残念ながら出来ませんでした。そこで「雷の子」の紙面を借りてご挨拶したいと思います。

わたしはみなさまの広い心とお祈りと励ましによって、とても実りある二年間を過ごすことができました。たいへんありがとうございます。最後に、何かみなさまに言い残したいことはないかと考えておりましたら、次の聖パウロの言葉が思い浮かびました。

「わたしたちすべてのために、その御子さえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。…だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。…死も、命も、…支配するものも、現在のものも、未来のものも、…わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」

イラスト 教皇フランシスコのメッセージ

カトリック中央協議会 (イラスト: 池永廣美)

祈りについて 神の恩恵によってキリスト教一致は実現する

不一致を克服し 和解の種を 蒔くように!

一致すること

命を賭すのではなく 祈られた

祈り

恩恵

贈り物

すべての人を一つに してください

父

一致を求める 私たちの祈りは このように謙虚で 主の祈りに信頼 して参加する

イエス (ヨハネ17:21)

私の愛にとどまりなさい。 そうすれば、 あなたがたは 豊かに実を結ぶ (ヨハネ15:5-9)

今年 キリスト教一致 祈り週間の テーマを 考察

教皇フランシスコ

わたしたち自身の 心の中でさえ 一致を保つことは できない

内部対立

平和 一致

解決策

神に求める ことでもたらされる

わたしは自分の 望む善は行わず、 望まない善を 行っている… (1コリ19:19)

欠陥・誇張

不和・分裂

悪魔の しわざ

祈りと 愛

一致の タネを まくように!

道具

家 職場

パンデミック

現在の 深刻な 危機の時

一致

克服

対立

争い

どれほど 信徒の一致を 祈っているか?

信徒全員が 考えてみよう

特別寄稿 拡大版

「転換期」でも

教区本部付司祭

(生涯養成担当)

猪熊 太郎

みなさまのうちには悩みや苦しみ、不安の中で過ごされていかたもいらつしやるでしょう。コロナ禍の下で、特別な困難を抱えられたかたもいらつしやるでしょう。ですが、聖パウロのことばを通して、神様は次のことを、そんなみなさまに向けて語りかけておられるのです。「恐れることはない」「わたしは決して、あなたを見捨てることはない」

主イエスは言います。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」この言葉を使徒ヨハネは説明します。「だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか」。わたしたちイエスを信じる者は、イエスの肉(聖体)を食べ、イエスの霊をいただいで、イエスと一つとなつています。ですから、かならずイエスと共に世の苦難に打ち勝つのです。主イエスを信じ、主により頼みましよう。主はかならず救ってくださいます。平和の神はみなさまと共にいます。神のいつくしみは世々としえに讃えられますように、アーメン。

それではみなさま、またいつかお会いできるのを楽しみにしています。

2021年、私は「還暦」

になりました。あつという間の60年でした。天に召された時、父は77歳でしたから、同じ頃に私も天の神様のものに行くとして(いや、地獄かもしれないが)、現役としての

時間は、あと15年ほど。残る時間を、誰のために、どのようを使うのか、真剣に考え、そして、すぐさま実行に移す一年にしたいと思っています。私の「転換期」です。

2021年は「辛丑年」。

「辛」は「草木が枯れ、新しくなるう」としている状態を、「丑」は「種から芽が出ようとする状態」を表すとのことです。つまり、今年は、「終わり」と「始まり」が重なる年らしい。世の中は、「転換期」を迎えたということ(政治も経済も文化も、そして、社会そのものが、大きく変わっていくの)でしょう。それが、アフター・コロナの世界です。

実は、中世ヨーロッパでも、そのような時期がありました。ペストの大流行の後、人々の意識は大きく変わり、時代の「転換期」を迎えました。中世

が終わり、ついには、あちらこちらで、ルネッサンスが始まったのです。そして、人々の意識の大きな変化に伴って、教会も、その仕組みを大きく変えることになりました。

コロナがいつ頃終息するか、今は誰にも分かりません。しかし、今まで通りの、2020年までの世界にはもう戻れないことを、今回皆が知ってしまったのです。分かってしまったのです(江戸から明治になった時、敗戦の時、先人たちは、皆、同じような経験をしてきたのです)。だとしたら、私たちはこれから、どうやって生きて行きましょう。

この大きな時代の「転換期」にあつて、しかし、「信仰者の生き方とは？」と問う必要はありません。新しい発明などいらないのです。社会が大きく変わり、社会の中に置かれている教会も大きく変わっていく時、いつも、先人たちがしてきたこと。それは、もう一度、イエスの生き方を見つめることでした。

何があつても、どんな状況になつても、神と「共に」、人々と「共に」生きる道がある。その方法は、既に、イエスによって示された。神の御旨は、イエスによって実現し

た。だからこそ、私たちは、2021年の今、そんなイエスの生き方を見つめ直します。それこそが、私たちの信仰の原点です。

コロナでできることは限られているかもしれない。しかし、すべきことは山のように用意されています。私たちが、新しい勇気と力と知恵を得て、新たな一歩を踏み出すことができそうです。そのため、良い一年となりますように！

今こそ信仰に生きよう！

汚れなきマリア修道会

Sr.吉村 瑠美子

新しい歌を主に歌え。

全地よ、主に向かって歌え。主に歌い、その名をたたえ日ごとに救いの良い知らせを告げよ(詩篇九十六)

私たちの新しい一日は、祈りで始まります。ご聖体の前で主をたたえます。御父、御子、主イエズス、聖霊と至聖三位のみ名を呼び、尊い交わりの中で祈ります。また、聖マリアと聖ヨゼフと共に、私たちのもとを去つた家族、友人たち、シスター方、信仰の導きをしてくださいました神父様方とみなで、御父をたたえて祈ります。「天におられる私たちの父よ」と。何にも妨げられることなく静けさの中で聖なる祈

りのときをもつて新たな一日を始めます。日々、新たに主の恵みに力づけられて……。

町田教会のみなさま、みな様方にお会いすることもなく二〇二一年を迎えて、もう二ヶ月近くが過ぎてしまいました。今年も世界を被(おほ)う新型コロナウイルスの感染拡大による不安と混乱の中で歩み始めることとなりました。今後の状況が全く見通せない中、教会生活にあつても今まで体験したことのない不自由さを味わう日々となっています。

制約の多い教会生活にあつても、私たちの信仰に生きる道はいつも大きく開かれています。今までの枠にとられない信仰の歩み方へと変えられながら、思い切つて新しい方へ踏み出しましょう。新しい目で現実を見て、新しい道を探し求めましょう。開かれている道を見出し、行動する勇氣を持つための第一の方法は祈り、第二は行動することです。祈りを通して心にとだいた気づき、小さな隠れた他者への心遣い、ささやかな奉仕に励むことではないかと思ひます。祈りによってこそ主の心を悟らせていただきます。世界中の信仰に生きる人々と思ひを一つにして、主の心を示されるよう祈りましょう。また、私たちのた

めに十字架を引き受けられた主イエスをじっと見つめながら主の愛の心をいただき、力づけられて、苦しみ困難に直面している人々を思い起こしながら、今、自分の前にある小さな奉仕をもって、愛を生きていきましょう。

多くの制約のある私たちの信仰の歩みは、祈りによって強められ、小さな愛の実践によって喜びの日々へと変えられていくでしょう。

信仰の人であった御子の母マリアに目を注ぎながら、マリアと共に主への道を歩みましよう。信仰を生きる道は、祈りと愛に生きる日々の中に……。

教会図書紹介

横塚 千枝子



町田教会の図書の貸出は1冊のノートに記録されています。それによると1年間で約250冊が貸出されていますが、コロナ禍の昨年は51冊に減少しました。2月末の灰の水曜日以降教会は閉鎖状態で聖週間や御復活の行事もなく、6月中旬からのミサ再開後もブロック別に月1回だけあずかれる形となり、ミサ後はすぐ解散というあわただしさでは図書の利用も限られてしまふのでしよう。家でゆっくり過ごす時間がふえたはずな

のに残念ですが、昨年は30冊新規登録しましたので、その中のいくつかを紹介します。

○詩編で祈る 来往 英俊著

御受難会の来往神父は祈りの基礎訓練が必要との考えから「目からウロコ」シリーズの本を女子パウロ会から次々と発行され、「とりなしの祈り」「ロザリオの祈り」「ゆるしの秘跡」「キリスト者同志の人間関係」「ミサのあずかりかた」「詩編で祈る」があり、後半の3編が登録されています。ミサ中に必ず読まれている詩編は私たちになじみがあり、自分の思いを詩編の言葉にのせると祈りやすくなり、感謝 賛美 信頼 などさめなどに分類してある本が参考になるそうです。

○自分史(持病と付き合ってこれ三十年) 田中 康晴著

田中神父は1966年叙階、1967年6月から3年間町田教会で助任、そのころから持病の躁うつ病が始まった。72年以降は大司教館付となり、カトリックセンターやペトロの家ですごされ教区を支える仕事をされた。病気のため11回も入院をくり返し、躁うつつの症状がくわしく語られ、それをのりこえて病気を持病として受容する心構えが記録されている。昨年11月帰天。

○すべてのいのちを守るため

教皇フランシスコ訪日講話集

カトリック中央協議会

2019年11月に訪日された教皇の語られたすべての言葉が記録されている。旅行前のビデオメッセージから帰途の機内での記者会見にいたるまで東京、長崎、広島でのそれぞれの行事、人々との出会い、ミサ説教等マスコミでも報道されたが全部ではないしその時だけで忘れてしまう。改めて読み返すと東日本大震災被災者との集い、青年との集いの講話が興味深い。教皇のやわらかさにつつまれる。

○いま、翔び立つとき

メルンダ・ゲイツ著 久保 陽子訳

著者の夫はビル・ゲイツ。世界最大の慈善団体の議長として、メルンダは20年間あまり貧困層を莫大な資金で支援してきた。妊娠、出産、育児等を担う女性たちのために尽くしてきた過程で、女性の地位の向上が世界の改善への道だと訴える。父親や夫達の意識を変え、説得する彼女の友人たちは強いが、児童婚や相続の際の男女の不平等など現実には痛ましい。

「男女の生命は対等である」と考える夫ビルとのやりとりも興味深い。自我イメージをより高く持つようにと励まされる本です。(井上 淑子)

信者動静

2020年12月～2021年2月

(個人情報のため、削除しています)

